

対人性愛中心主義批判の射程に関する検討：フェミニズム・クィアスタディーズにおける対物性愛研究を踏まえて

松浦，優
九州大学大学院人間環境学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7151776>

出版情報：人間科学共生社会学. 12, pp.21-38, 2023-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

対人性愛中心主義批判の射程に関する検討

— フェミニズム・クィアスタディーズにおける対物性愛研究を踏まえて —

松 浦 優

要 旨

本稿では、非対人性愛の周縁化をより精緻に捉えるための作業として、二次元をめぐる非対人性愛に関する筆者の研究と、対物性愛に関する先行研究とを接続し、そこから見えてくる論点を検討する。まず筆者の研究をもとに、対人性愛中心主義とバトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」との関係を要約したうえで、二次元と三次元との存在論的差異の「無意味化」によって、二次元に関する非対人性愛が抹消されるということを確認する。次に対物性愛について、とりわけフェミニズムやクィアスタディーズにおける先行研究を紹介する。

以上を踏まえて、対物性愛のあからさまな排除と、二次元をめぐる非対人性愛の抹消が、どちらも対人性愛中心主義に根差していることを確認する。そして非対人性愛の無意味化を捉えるための概念をいくつか提案しつつ、非対人性愛が対人性愛の表象とみなされることによって無意味化されるという問題を指摘する。こうした非対人性愛の周縁化を批判するためには、単に非対人性愛について問うだけでなく、翻って対人性愛を基準とした知のあり方そのものを問い直すことが必要である。

キーワード：セクシュアリティ、ノンヒューマン、人間性愛規範

1 はじめに

性的マイノリティに関する従来の議論においても、性愛の対象が人間であることは自明とされてきた。これに対して近年では、「生身の人間を志向するセクシュアリティ」を指す語彙として、「対人性愛」という造語が提起されている。これは、マンガやアニメなどの「二次元」の性的表現を愛好しつつも生身の人間には性的に惹かれない、という人々によって草の根的に用いられるようになった造語である¹⁾(松浦 2021b)。こうした人々は、対人性愛が自明のものとなる状況のもとで不可視化されるが、そのような状況を「対人性愛中心主義」と呼ぶことができる(松浦 2021b)。

ただし「非対人性愛」と言った場合には、二次元の存在をめぐるセクシュアリティ以外にも

さまざまなセクシュアリティが含まれる。そのため二次元をめぐるセクシュアリティだけに議論を閉じるのではなく、より広い領域へと議論を開くことが必要である。本稿では、主に対物性愛に関する先行研究に注目したうえで、そこでの議論と二次元をめぐる議論との類似点や相違点を比較しながら、非対人性愛について考えるうえで注意すべき論点をいくつか提示する。

まず第2節では、筆者のこれまでの研究に依拠しつつ、対人性愛中心主義概念と、二次元をめぐるセクシュアリティについての議論を説明する。次に第3節で、対物性愛に関するフェミニズム・クィアスタディーズ的な先行研究を紹介する。以上を踏まえて、第4節でいくつかの論点を提示・検討し、第5節で本稿で扱いきれなかった課題に言及する。

2 背景 — 「二次元」へのセクシュアリティと対人性愛中心主義

2.1 対人性愛中心主義と強制的性愛との重なり — 「〈字義どおり化〉という幻想」

まずは対人性愛中心主義の理論的位置づけについて整理しておく。対人性愛中心主義は、ジュディス・バトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」と密接に結びついている（松浦 2022b : 150）。バトラーによれば、異性愛主体は同性愛の可能性を予め排除することによって構成される。予めの排除（foreclosure）とは、同性愛の可能性を予め締め出したうえで、締め出したということ自体を否定する、という異性愛主体の構成プロセスのことである。このようにして成立した異性愛主体においては、「解剖学的」なセックスと、「自然なアイデンティティ」としてのジェンダーと、「自然な欲望」としての異性愛とが結びついている（Butler 1990=1999 : 135）。この結びつきをバトラーは「〈字義どおり化〉という幻想」と呼ぶ。

ところで、なぜ同性愛の可能性を締め出すことで異性愛主体が成立するのか。言い換えれば、「同性へ性的に惹かれなければ異性愛者だ」とみなされるのはなぜなのか。それは、同性愛／異性愛という二項対立が前景化する瞬間に、異性愛とも同性愛とも呼べないさまざまなあり方が予め抹消されているからである（松浦 2021b）。つまり異性愛規範による同性愛の予めの排除は、ある意味では「異性愛とも同性愛とも呼べないさまざまなあり方」の抹消に支えられているのである。その「さまざまなあり方」のひとつとして、非対人性愛が位置づけられる。それゆえ、対人性愛中心主義のもとでさまざまな非対人性愛が抹消されるという事態は、「〈字義どおり化〉という幻想」を構成する要素なのである（松浦 2022b : 152）。

なおバトラーは、異性愛主体の形成過程における同性愛的愛着の禁止を論じる際に、「恐らくセクシュアリティは、諸事物、諸動物、それらすべての一部分、そして様々な自己愛的愛着から距離を取るよう訓練されているはずである」と注記している（Butler 1997=2012 : 187）。この点を概念化したのが対人性愛中心主義だと言える。

このように、二次元をめぐるセクシュアリティの不可視化は、異性愛／同性愛という図式が前景化する際の前提と位置づけられる。このような位置づけでの周縁化は、アセクシュアルの周縁化と共通するものである。実際に、「二次元の性的表現を愛好しつつ、生身の人間へ性的に

惹かれたい」という人々のなかには、アセクシュアル・アイデンティティを表明している人もいるほか、生身の人間への性的惹かれが自明とされる状況下でアセクシュアルと類似した経験をする人々もいる²⁾ (松浦 2021a)。

それゆえ対人性愛中心主義は、アセクシュアルの議論で言われる「強制的性愛」(compulsory sexuality) (Gupta 2015) と親和的な概念である。強制的性愛とは、セックスやセクシュアリティを他の活動よりも特別なものと位置づけ、セックスやセクシュアリティを自己形成や自己認識、健康、愛や親密性と結びつける規範であり (Przybylo, 2016 : 185)、「さまざまな形態の非-セクシュアリティ (性的関心の欠如、性的行為の欠如、またはセクシュアリティの喪失を含む) を周縁化する」ものである (Gupta, 2015 : 135)。またこの言葉は「強制的異性愛」にならった造語であり、理論的にはミシェル・フーコーによる「セクシュアリティの装置」論を発展させたものと言える (松浦 2022c [近刊])。

また対人性愛中心主義は、婚姻制度をめぐる議論で提起された「恋愛伴侶規範」(amatonormativity) (Brake 2012=2019 ; 夜のそら 2020) とも重なる。恋愛伴侶規範とは、「中心的で排他的な恋愛関係こそが人間にとって正常であり、また普遍的に共有された目的であるという想定」(Brake 2012=2019 : 157) を表す造語である。恋愛伴侶規範のもとで、アセクシュアル、独身者、ポリアモリー、友人関係やケア・ネットワークが不当に低く価値づけられることになる。

これらの概念は、それぞれ強調点や、概念化にいたった歴史的背景が異なるため、いずれかひとつに還元できるものではない。しかしいずれも、性が人間関係や社会制度と結びつきつつ過剰な意味づけを付与されてきたという状況を問題化し、特定の性的／恋愛のあり方を特権化する制度や慣習を批判する概念だと言える。

2.2 二次元をめぐるセクシュアリティの不可視化——無意味化による抹消

「〈字義どおり化〉という幻想」は二次元の性的表現を愛好する営みにとって大きな問題となる。二次元表現においては、二次元キャラクターは字義どおりには人間ではない。こうしたキャラクターは、制作者の創作活動を通して生み出され、絵や文書や映像などのメディアによって、そして受容者の想像や認識活動によって存続する、という独特な存在物である (e.g. 倉田 2019)。とりわけマンガやアニメなどの二次元をめぐるセクシュアリティにおいては、この存在論的差異がきわめて重要な意味を有してきた (松浦 2022a, 2022b)。つまりこうした人々は、文字どおりには人間ではない存在に、性的、恋愛、あるいは実存的に、コミットメントしてきたのである。しかしこうした非対人性愛的なあり方は、「快楽と欲望の原因は身体のある部分、「字義どおりの」ペニスであり、「字義どおりの」膣であるという信仰」(Butler 1990=1999 : 135) のもとで、存在を抹消されるのである。

二次元に対する非対人性愛は、なぜ人間ではなく「単なる絵」に欲情するのかと疑念を向けられることもあるが、しかし近年ではより巧妙な仕方でも不可視化されることがある。すなわち、二次元の性的表現は単に表現技法がマンガ・アニメ的であるだけで、あくまで欲望の対象となっ

ているのは人間だ、という仕方に対人性愛へと還元されてしまうのである。また「オタク」が一般化した現在では、二次元表現を愛好する営みは、単なる趣味やコンテンツの問題とみなされるようになり、セクシュアリティの議論から切り離されてしまっている。このように、二次元をめぐる非対人性愛は、あからさまな抑圧や排除とは異なる仕方存在を抹消されているのである。

このような抹消は、二次元と三次元との存在論的差異を無意味化する、という仕方生じている³⁾(松浦 2022b)。無意味化と予めの排除は異なる形式のものだが、しかしどちらも(パトラー的な意味で)社会的権力の心的機制とみなせる。つまり対人性愛中心主義による無意味化は、非対人性愛を周縁化する社会的な問題なのである。

3 対物性愛に関する先行研究

以上のように、対人性愛中心主義への問題提起は、二次元をめぐるセクシュアリティとアセクシュアルとの文脈から提示されてきた。しかし「さまざまな非対人性愛」のなかには、この2つ以外のセクシュアリティも含まれる。その一例として、対物性愛が挙げられる。そこで以下では対物性愛の先行研究を参照しつつ、非対人性愛に関する議論の拡張を試みる。

対物性愛は性倒錯や精神病理とみなされがちだったが、近年では、クィアスタディーズやフェミニズムの文脈を踏まえうえて、対物性愛者自身の語りや活動に依拠した研究がなされつつある。本節ではこれらの先行研究について、対物性愛の人々が被る困難や周縁化に焦点を当てながら整理する。

対物性愛とは、物に対して性的／恋愛的に惹かれたり、親密感情を抱いたりするセクシュアリティである。Objectum-sexuality という言葉は1970年代に当事者によって作られた造語であり、1990年代以降にはインターネット上でのコミュニティが作られている(e.g. オブジェクトゥム セクシュアリティー インターナショナル 2022)。また関連する言葉として、機械に惹かれる人々を指すメカセクシュアル(mechasexuals)などの言葉がある(Marsh 2010)。

先行研究や当事者の語りでは、対物性愛者は特定の物に対して深い愛情や多様な感情を抱くことが強調されており、それゆえ単なるパラフィリアやフェティシズムではないと主張されている⁴⁾(Marsh 2010; Terry 2010)。もちろん、フェティシズムとの違いを強調するあまり、フェティシズムへのステイグマ化に加担してしまわないよう注意が必要である(Terry 2010: 49)。しかし、人間にはない特徴に魅力を感じるという語りから、対物性愛者の欲望の対象は人間(あるいは人間の身体部位)の代替物ではないと示唆されている(Terry 2010: 50)。

このようなセクシュアリティは、マジョリティにとってはきわめて特異なものだと思われるかもしれない。しかしながら、物に対して強い愛着を抱くことや、あるいは物との接触をとおして人格や性格が形成されていくことは、決して珍しいことではない⁵⁾。対物性愛もまたこうした現象の延長であり、その意味でマジョリティのあり方と連続的ではないか、と指摘されて

いる (Terry 2010)。

対物性愛者が物をどのように捉えているのか、また物とどのような関係を築いているのか、ということは人によって多様である (Marsh 2010)。たとえば、物に性別があると感じる人もいれば、感じない人もいる。物に性別を認める人のなかには、その物を「彼」「彼女」ではなく「それ」(it) と呼ぶと、相手を生気のない (inanimate) ものとみなすことになり、それによって相手を格下げすることになる、と考える人もいる (Terry 2010 : 38)。

また物に性別を感じる人のなかにも、特定の性別が好みだという人もいれば、好みの性別はないという人もいる。もちろんそこでは、物との「異性愛」にかぎらず、「同性愛」という人もいれば「バイセクシュアル」「パンセクシュアル」あるいは「アセクシュアル」という人もいる。このほかにも、ひとつの物とのモノガミー的な関係を好む人もいれば、複数の物と関係を持つ人や、あるいは物と人と同時に関係を持つ人もおり、ポリアモリーを自認する人もいる。他方で、人間との性的関係を考えたことがないという人もいる (Marsh 2010)。

物とコミュニケーションについても人によって異なる。双方向的にコミュニケーションができるという人もいれば、一方向的なコミュニケーションをしているという人もおり、またコミュニケーションはないという人もいる⁶⁾ (Marsh 2010)。またそこで言うコミュニケーションは必ずしも言語的なものにかぎらず、心を通わせるという仕方の場合もある。なお物とのコミュニケーションについては、物体擬人化共感覚 (object personification synesthesia) という共感覚の一種として説明できる可能性が示唆されているが (Marsh 2010)、後述するように「擬人化」という捉え方には注意が必要である。

このほか、対物性愛者になる原因は、対人関係の問題や性被害経験なのではないか、とイメージされることがある。もちろん対物性愛者のなかには性被害を受けたことのある人もいるが、当然ながら全員がそうだというわけではない (Marsh 2010)。対物性愛の「要因」については今後の慎重な分析が必要な論点であり、また前提として個々人ごとに多様だという点に注意が必要である⁷⁾。

エイミー・マーシュの調査によれば、大多数の対物性愛者は物に惹かれるという自身の志向に満足している。対物性愛者の不幸やストレスの多くは、社会的な無理解や偏見、そして周囲の人々からの干渉によって生じているのである (Marsh 2010)。そのような苦悩の例として、物に惹かれるという志向を他の人々に明かすことができず、クローゼットの状態にとどまらざるをえないことが挙げられる。また、自身の愛や親密関係を公にすることができないことも挙げられている。

さらにテリーは、対物性愛の周縁化と異性愛規範との関係を指摘している (Terry 2010 : 49)。たとえば、人間に対してなすがままである (かのように見える) 物に対して積極的に性愛関係を宣言する女性は、異性愛規範のもとで期待されるような、男性からのアプローチを受動的に待つという女性像に真っ向から対立するものである。実際にこうした女性たちは、ドキュメンタリー番組のなかで、公共の場で物とセックスをしているとほめかされることによって、ふ

しだらな女性という悪名と暗に結びつけられていた。こうした女性たちは、セクシズムと異性愛規範とに対立する面を有しているのである。

ただし対物性愛の周縁化は異性愛規範には還元できず、また周縁化される仕方とも同性愛とは異なる。このことが、性に関する規範性 (normativity) を言語学的に調査した研究で示されている。異性愛／同性愛は強いアイデンティティとして語られることが多いのに対して、対物性愛はアイデンティティとしてではなく性的実践や性的欲望として語られる傾向にある (Motschenbacher 2018)。このような傾向は、性的アイデンティティとして社会的に認知されていないセクシュアリティに特徴的なものである。

また、ヘテロノーマティヴィティやホモノーマティヴィティ以外の性的な規範として、「人間との性的関係は無生物と関係することよりも望ましい、あるいは自然であるという信念」 (Motschenbacher 2014 : 57) や「普通は自然に性的実践と恋愛関係を他の人間とするものだという信念」 (Motschenbacher 2018) を表す人間性愛規範 (humanonormativity) という概念が提示されている⁸⁾。この規範は対物性愛を異常で病的なもののみならず言説として顕在化する。こうした周縁化に対しては、規範的とされているセクシュアリティに関する言説資源を流用することによって、対物性愛に正当性を付与するという抵抗実践がなされることもある。こうした抵抗は、人間中心主義 (anthropocentrism) あるいは人間性愛規範 (anthroponormativity) と異性愛規範という二重の社会的タブーに交渉する、対抗的公共性 (counterpublic) を切り拓く実践とも言える (Cole 2022)。

人間性愛規範に類する議論は別の形でも提起されている。そこで問われているのは、人間－人間以外の動物－動物以外の物を明確に区別しつつ序列化する、という支配的な有生性階層⁹⁾ (animacy hierarchy) である。たとえば、壁や柵や塔よりもリアルドールのほうが「より正当な」性愛対象であるという発想では、「その対象が人間であると想像されるかどうか」や対象が「人体の構造的形態を備えているかどうか」という基準による正常／異常のヒエラルキーが前提となっている (Terry 2010 : 60 強調原文)。対物性愛はこの序列化と対立するものだと言える (de Szegheo-Lang 2015)。このような点で、対物性愛についてはクィア理論の観点からも議論されているのである¹⁰⁾。

対物性愛に関する先行研究はいまだ数がかぎられており、さらなる調査は今後の課題である。とはいえ、対物性愛者が被る周縁化の問題が、すでにセクシュアリティやジェンダーに関する議論と接続されながら論じられている。こうした議論は、対物性愛研究のみならず、より広い領域の研究でも参照されるべきだと考えられる。

4 非対人性愛の周縁化に関する諸論点

以上を踏まえたうえで、非対人性愛をめぐる論点をいくつか検討するが、その前に、人間性愛規範と対人性愛中心主義の関係を手短かに確認しておきたい。人間性愛規範と対人性愛中心主

義は、それぞれ対物性愛と二次元をめぐるセクシュアリティという異なる文脈から提起された概念である。しかしいずれも、人間へ性的に惹かれることを自明視する規範を指す概念であるため、両者はある程度互換可能だと思われる。それゆえ対物性愛研究においても、対人性愛中心主義をめぐる議論が示唆をもたらすと考えられる。

そしてこのとき、対人性愛中心主義には強制的性愛批判の文脈が含まれている、という点に注目する必要がある。この点が、人間性愛規範概念と対人性愛中心主義概念の大きな違いである。従来の対物性愛研究ではアセクシュアルに関する議論はほぼ参照されておらず、また逆にアセクシュアル研究でも対物性愛に関する議論は十分参照されてこなかった。これらを架橋することによって、従来の議論で見落とされていた論点をカバーすることができる可能性がある。

たとえば対人性愛という概念は、人間に対する、人間と相対する、といった、セクシュアリティの空間的側面を捉えている。すなわち、一般的に想定されるセクシュアリティは、たとえば「そばにいたい」「抱き寄せたい」というような、「相手との空間的な近さを求める」ものと思われる。こうした想定を「空間的近接性の志向の自明化」と呼ぶことができる(松浦 2022c [近刊])。しかしながら、空間的近接性の志向もまた普遍的なものではない。対人性愛中心主義への批判には、このような論点も射程に含まれるのである。こうしたことを踏まえたくて、以下では今後の研究に向けて、非対人性愛に関するいくつかの論点を考察する。

4.1 排除／抹消の両方をもたらす対人性愛中心主義

二次元キャラクター(とりわけ抱き枕)を愛する人の事例は、対物性愛研究の文脈でもときおり言及されている(e.g. Terry 2010; Chen 2012: 204)。抱き枕やフィギュアは物質的な物として存在しているが、物質的に造形されていない場合でも、特定の作者による創作行為によって作り出されるという意味で、二次元キャラクターは人工物的な特徴を有している(倉田 2019)。その意味で、フィクトセクシュアルや二次元性愛と対物性愛の間には類似する側面がある。

他方で両者の違いとして、二次元キャラクターは人間(ないし人間のような形態をしている)とみなされる、ということが挙げられる。それゆえ、フィクトセクシュアルや二次元性愛のほうが社会的に承認されやすいのではないか、と思われるかもしれない。近年「オタク」が一般化していることを考えれば、一面では正しい。しかしすでに述べたように、この「承認」では対人性愛中心主義が前提とされており、それゆえフィクトセクシュアルや二次元性愛がそれ自体として承認されているわけではない。そこでは、二次元キャラクターに対するセクシュアリティが「ファン」や「オタク」と認識され、単なる「趣味」とみなされることによって、いわばマジョリティに回収されるという仕方で抹消されるのである(松浦 2021b)。

対物性愛が「異常」なものとしてあからさまに排除されやすいのに対して、フィクトセクシュアルや二次元性愛は対人性愛との差異を無意味化されることによって巧妙に抹消されることがある。ただし後者またも排除の対象となる場合はあり、また排除と抹消の境目は流動的なものである。本稿にとって重要なのは、排除／抹消が別個の現象なのではなく、両者ともに対人性

愛中心主義という同じ規範にもとづく周縁化だということである。

4.2 形態的本質主義 (morphological essentialism)

また、人型の二次元キャラクターは無前提に人間（ないし人間のような形態をしている）とみなされる、ということ自体の問題も指摘しておく必要がある。このような認識は、形態のみにもとづいて人間／非-人間が明確に区別できるとする、いわば形態的本質主義である。

形態的本質主義的な発想のもとでは、人間を象った人工物は単なる人間の代替とのみ捉えられることになり、形態以外の側面（物質性やコンテキストなど）が有する性質や意味が捨棄されてしまう¹¹⁾。このような発想によって、二次元へのセクシュアリティは対人性愛へと回収され、抹消されてきたのである。それゆえ人間に関する形態の本質主義は、対人性愛中心主義を温存するものだと言える。

さらに人間に関する形態的本質主義は、規範的な「人間」の姿をしていない人々を排除するものでもある。そこでは、たとえば人種や障害や性など、さまざまな点で「規範のとされる人間の形をしていない」とみなされた人々が、非-人間として排除される。この点でもまた、排除と抹消は表裏一体なのである。

4.3 対人性愛への回収による抹消——「擬人化」をめぐる理解の整理

さらに対人性愛への回収による抹消は、フィクトセクシュアルや二次元性愛のみの問題ではない。非-人間に対する性的／恋愛的惹かれは、しばしば対象を擬人化¹²⁾しているとみなされる。たしかに非-人間との性愛や親密性を説明するうえで対人性愛の語彙を用いることはあるが、だからといってそうした人々は自身の愛する対象を人間に変換しているわけではない。

たとえば動物性愛者も、しばしば動物を擬人化して人間の代替として扱っているのだと誤解される。また動物性愛者のなかには、パートナーである動物に個性や固有性があるという点に関して、当該の動物に対して「パーソナリティ」を認めると語る人もいる。しかし「動物性愛者にとって犬は犬でなければならず、それゆえ「パートナーを擬人化することはない」（濱野 2019：400）。対人性愛や人間になぞらえる語彙を用いているからといって、対人性愛に還元できるわけではない、ということが重要である。

このことは、フィクトセクシュアルや二次元性愛、そして対物性愛についても重要となる。非-人間を「人格」的に扱うことは、その対象を文字どおり人間として経験することを必ずしも意味しない。ある対象に「人格」や「パーソナリティ」を感じられることと、ある対象を「人間」とみなすことを、概念的に区別することが重要である¹³⁾。さらに言えば、生き生きとした魂を感じられること (animate) と、生物であること (organism) も区別しなければならない¹⁴⁾。

重要なのは、性的あるいは恋愛的魅力を感じるからといって、その対象を人間として経験しているとはかぎらない、ということである。たしかに対物性愛の先行研究でも触れたように、非-人間との性愛を他者に説明するうえで、当事者自身が対人性愛の語彙を用いることはある。

こうした説明は一見すると社会における（異）性愛規範を踏襲しているように思われるかもしれないが、しかしそこでは対人性愛は再生産されていない。この差異を抹消しないことが決定的に重要である（松浦 2022a）。

4.4 実体／表象という序列化——「代替」「隠喩」「象徴」とみなすことの暴力性

非－人間をめぐるセクシュアリティに対しては、「本来は人間を欲望している（べきである）はずだが、人間の代替として非－人間を欲望しているのだ」という偏見が向けられてきた。これもまた対人性愛への回収による抹消と言える。こうした見方に対する反論は、さまざまな非対人性愛的な営みをめぐる議論で繰り返し強調されてきた。

たとえば対物性愛研究でも、対物性愛者は人間（あるいは人間の身体部位）の代替として物を欲望しているのではない、と指摘されていた。また「フィクトセクシュアル」や「二次元性愛」を自認する人にも、「絵じゃないとダメ」（松浦 2021a：122）と語る人が現にいる。あるいは、ラブドールもまた「人間の代わり」と誤解されがちだが、実際の愛好者は「最初の動機が人間の代わりだったとしても、最終的にはラブドールそのものを親密な関係の対象としていることが多い」（関根 2021：219）と指摘されている。

この問題は、象徴人類学のアニミズム研究に見られる西洋中心主義と同型の問題だと考えられる。象徴人類学の研究では、先住民がアニミズム的な信念を説明していても、その説明をあくまで人間社会の「隠喩」「象徴」「表象」として解釈し、先住民は字義どおりの真実を語っていないのだとみなしてきた（Willerslev 2007=2018：37-40）。これに対してウィラースレフは、先住民の実践に依拠しつつ「アニミズムを真剣に受け取る」ことの必要性を強調している¹⁵⁾。今後はこうした議論も参照しつつ、非対人性愛を対人性愛の「隠喩」「象徴」「表象」に還元することなく——つまりマジョリティの解釈図式に還元することなく——扱うことが重要である。

実際に、非対人性愛的な営みは、対人性愛のあり方を反映した単なる表象として扱われてきた。つまり非対人性愛的な営みは、単なる対人（異）性愛の「表象」や「反映」とみなされてきたのである。しかしこうした見方は、対人性愛を真正な実体とみなしつつ、非対人性愛を実体としては認めない、という非対称性を暗に前提としている。

とりわけこの問題が顕著に現れるのは、倫理的価値判断がなされる場面である。たとえばセックスロボットをめぐる倫理的論争では、「セックスロボットは人間の性をどのように表象しているのか、ということと、そうした表象はどんなインパクトを与えるのか」といったことが主に議論されている¹⁶⁾（Stone 2022：52）。同様に、非対人性愛的な領域を対人（異）性愛の「表象」として倫理的に問題化する議論は、たとえばラブドールの容姿をめぐる議論（関根 2021）や、二次元の性的表現をめぐる議論¹⁷⁾、あるいは架空の児童を性的対象とする創作物をめぐる議論（e.g. Luck 2009；Galbraith 2017）でもなされてきた。

上のような倫理的論争は、一見するとそれぞれの対象がもたらす「客観的」な社会的影響を問うものであり、非対人性愛的な人々の意味世界を否定しているわけではないように思われる

かもしれない。しかしこうした議論において、非対人性愛的な欲望の対象である非人間は、あくまで「人間」という別の存在者の表象とみなされており、それ自体は存在者としての地位を認められていない。そしてこのような図式は、まさに非対人性愛の存在を不可視化し、非対人性愛的な人々の主観性を否定するものである。

さらに上記のような議論では、対人性愛そのものが問いの対象とされることはない。せいぜい対人性愛実践のうちの一部（たとえば性暴力など）が批判や問いの対象とされるだけであって、たとえば性的表現やセックスロボットがもたらす（とされる）問題は、決して「対人性愛がもたらす問題」とは言われないのである。また同様に、従来の議論では、非対人性愛的な対象や営みが対人（異）性愛の「表象」であることが所与の前提にされており、なぜそれらが対人（異）性愛の「表象」になるのか、と問う可能性が予め締め出されている。筆者が過去に用いた用語で言えば、「誤配可能性を抹消する社会的権力」（松浦 2022b：152）が無批判に温存されているのである。

このように、「性的表現が一方向的に問いの対象にされているのに対して、対人性愛が自明のものとして不問に付されている、という非対称性」（松浦 2022b：154）が強固に存在する。要するに従来の議論では、実体／表象という序列化された二分法¹⁸⁾がひそかに持ち込まれており、それによって非対人性愛の存在が暗に抹消されているのである¹⁹⁾。そのため、非対人性愛（の欲望の対象）を対人性愛（の欲望の対象）の「表象」として解釈する際には、前者は後者の表象であると無条件に前提するのではなく、どのようにして前者が後者の表象になるのか——どのような条件や要因のもとで、またどのような意味で、表象となるのか——という問いに開かれていなければならない。

さらにこうした問題は倫理的論争にかぎったものではない。非対人性愛をある種の象徴として解釈し、対人性愛へと回収する見方は根深い。たとえば建造物を愛する対物性愛者が、精神科医から「建造物とセックスをすることは不可能だ」とか「その建造物を愛しているのは、それが大きなファルスだからだ」と言われた、という事例がある（Cole 2022：332）。対物性愛者が自身のあり方を語る際に、「挿入としての性行為」に限定されない広い官能性（Sensuality）や親密性（Intimacy）を強調する場合があるが、その背景にはこうした対人（異）性愛を自明視する見方への対抗という文脈があるのである。

このように、非対人性愛を実体として認めないということが、対人性愛中心主義を維持・再生産してきたのである。そして同様の問題は、非対人性愛に関する経験的調査でも生じうる。たとえばマーシュは対物性愛者にアンケート調査を行なった際に、「セルフプレジャー（マスターベーション）をどのぐらいの頻度で行いますか」という設問を設けていた。しかし調査後の分析の段階で、この設問が対人性愛を前提にしたものだったとマーシュは気づいた。「対物性愛者でない人がマスターベーションだと考えることを、対物性愛者は（常にそうだというわけではないかもしれないが）しばしばパートナーとのセックスだと考えている」ということを、設問作成時に理解できていなかったのである（Marsh 2010）。このように、非対人性愛的な営

みを研究するさいには、単に非対人性愛を問うだけでなく、翻って対人性愛を基準とした知のあり方そのものを問い直すことが必要となるのである²⁰⁾。

4.5 セクシュアリティと「人格」的交流との結びつきを相対化する

他方で、非-人間との性愛をめぐる従来の研究や運動では、対象との親密性や「人格」的交流が強調されてきた。たとえば対物性愛に関しては、官能性や親密性が強調されたり、対物性愛的な愛はマジョリティが物に愛着を持つことと連続的であると主張されたりしてきた²¹⁾ (Cole 2022)。対人性愛を基準とする想定のもとで、非対人性愛が「異常」な「性的倒錯」とみなされてきた、ということを考えれば、こうした対抗言説の重要性はもちろん否定できない。しかしこうした対抗言説についても、セクシュアリティが親密性や「人格」的交流と強固に結びついている（べきである）、という想定を批判的に問う必要がある。

この問題は、フェティシズム的とされるセクシュアリティのスティグマ化と関わる。たとえば、非-人間へ性的には惹かれるものの恋愛感情や親密性を志向していない人は、現時点での研究ではあまり顕在化されていない。恋愛感情や親密性を希求せず、ただ性的にのみ非-人間を欲望することは、一見するとフェティシズムだと思われるかもしれない。しかし（すくなくともフロイト的な意味での）フェティシズムとは異なり、非-人間そのものを欲望するセクシュアリティは、対人性愛の代理として別の対象を欲望するものではない。そしてこうしたセクシュアリティもまた、社会のなかで存在しないことにされてきたものである²²⁾。

あるいは、性的空想をしたり性的創作物を受容したりする一方で、現実生活では他者へ性的に惹かれられないという人々がいる。こうした人々はエーゴセクシュアル (aegosexual、自己無関与性愛) という語彙でアセクシュアル・スペクトラムとしてのアイデンティティを表明している場合がある (松浦 2021b; Winter-Gray and Hayfield 2021)。親密で「人格」的な身体的触れ合いが存在しないからこそ、対人性愛から距離を取り、そして対人性愛を相対化する可能性に開かれるのである。

これに対して、物や非-人間との関係において親密性や「人格」的交流を強調すると、上記のような人々を不可視化してしまう可能性がある。さらに言えば、そもそもセクシュアリティと「人格」的交流が結びついているべきであるという規範自体が、対人性愛を基準とする規範なのではないだろうか。対人性愛中心主義や人間性愛規範を批判するうえでも、強制的性愛や恋愛伴侶規範の問題を見落とさないことが重要である。

5 今後の課題

対人性愛中心主義という概念は、二次元をめぐるセクシュアリティの文脈において、アセクシュアルの立場からの強制的性愛批判と結びつきながら、提起されたものである。本稿で示したのは、対人性愛中心主義概念が対物性愛の周縁化を捉えるうえでも適用できるということ

ある。とりわけアセクシュアルに関する研究との接続は、従来の対物性愛研究にはなかったものである。

さらに本稿では、対人性愛中心主義が排除／抹消のいずれにも関わっていることや、さまざまな非対人性愛が実体／表象という二分法的な序列化によって不可視化されていることを論じた。今後非対人性愛について議論するうえで、こうした周縁化の諸相を認識することが重要だと言える。

以上を踏まえて、今後はこうしたさまざまな非対人性愛に関する具体的な調査が必要である。本稿では対物性愛について論じてきたが、あくまでかぎられた先行研究にもとづく予備的考察であり、そもそも先行する調査自体がまだ少数にとどまっている。対物性愛に関する調査は今後の大きな課題である。

また本稿の議論はロボットやAIとの性愛にも関わる可能性がある。このようなトピックについて、近年では技術倫理の領域での議論がなされており（西條 2013；匿名希望 2020；Stone 2022）、今後も議論が続くと予想される。こうした領域においても、対人性愛を自明視しない仕方での議論が必要である。

これと関連して、しばしばフィクトセクシュアルもAIなどのテクノロジーとの関連で理解され（Dooley and Ueno 2022）、「デジタル・セクシュアリティ」や「デジセクシュアル」（McArthur and Twist 2017）として論じられることがある。たしかにフィクトセクシュアルにとってデジタルテクノロジーが意味を持つ場合はあるが、しかしフィクトセクシュアルは近年の技術のみに依存するものではなく、さまざまな非対人性愛との共通点や関連する論点を含んでいる。こうしたセクシュアリティを技術論のみに切り詰めない仕方捉えることが重要となるだろう。

最後に、本稿の議論はオブジェクト指向存在論や新しい唯物論など近年の思想潮流とも関わる可能性がある。こうした思想的考察は本稿では扱えていないため、今後の課題としたい。

謝 辞

本稿にご助言いただいた池山草馬、関根麻里恵に深く感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。なお本研究はJSPS 科研費（課題番号21J11381）の助成を受けたものである。

注

- 1) 二次元の性的表現を愛好しつつも生身の人間には性的に惹かれない人々や、二次元キャラクターと性愛関係を結ぶ人々のなかには、フィクトセクシュアル（fictosexuality：虚構性愛）というラベルを用いる人がいる（Karhulahti and Välisalo 2021；松浦 2021b）。ただしフィクトセクシュアルという言葉は、二次元表現にかぎらず、たとえば小説などの登場人物に対するセクシュアリティも含まれる。それゆえ特に二次元文化の慣習に依拠している

- セクシュアリティを「二次元性愛」と表記する。
- 2) フィクトセクシュアルに関するウェブ投稿においても、広義のアセクシュアルとして自身を説明する当事者や、アセクシュアルとの親和性を語る言説が見られる (Karhulahti and Välisalo 2021 ; 松浦 2021b)。ただしすべてのフィクトセクシュアルがアセクシュアルを自認しているわけではなく、アセクシュアルとフィクトセクシュアルはあくまで部分的にのみ重なるものと考えるべきである。
 - 3) この無意味化については、ウィニコットの言う「ただ意味を失う」という心的機制として説明している (松浦 2022b : 151)。また「無意味化」による不可視化という理論は、対物性愛の周縁化にも適用できるかもしれない。
 - 4) フェティシズムについては、対物性愛をマルクスの言う「商品フェティシズム」とみなす解釈への批判もなされている (e.g. Musser 2013 ; Cole 2022)。
 - 5) こうした現象について、テリーはブルーノ・ラトゥールやダナ・ハラウェイやシェリー・タークルらの研究を挙げている。
 - 6) マーシュによる対物性愛者への調査では、一人だけだが、愛する物とコミュニケーションができず悲しいという回答をした人がいる (Marsh 2010)。この点はフィクトセクシュアルとも関わる論点である。フィクトセクシュアルの人々は「虚構と現実を混同」しているのではなく、また自分とキャラクターとの関係がパラソーシャルな関係であることを自覚している (Karhulahti and Välisalo 2021)。そうしたなかには愛するキャラクターとコミュニケーションがとれないことを悲しむ人もいる。

そのことに留意しつつ、しかし対物性愛の先行研究から考えれば、架空のキャラクターとは双方向的コミュニケーションが不可能だと予め想定するべきではないだろう。フィクトセクシュアルの文脈からは外れるが、たとえば少なからぬ小説家が、自分の書いたキャラクターが自分に話しかけてくるという経験をしている (Foxwell et al. 2020)。またフィクトセクシュアルを自認する人のなかにも、愛する相手 (ここではマンガやアニメなどのキャラクター) との言語的ないし非言語的なコミュニケーションがありうる。
 - 7) なおマーシュは、性的トラウマよりも共感覚や自閉症のほうが対物性愛の「原因」と言える可能性は高いのではないかと示唆している (Marsh 2010)。
 - 8) モツェンバッハー (Motschenbacher 2018) は、セクシュアリティに関するコミュニケーションを構造化するものとして、規範性 (normativity) を言語学的に研究している。そのさいにモツェンバッハーは、社会で広く共有されたマクロレベルの規範性と、個別のコミュニケーション場面で動員されるミクロレベルの規範性とを区別し、両者の関係や交渉を分析している。
 - 9) 有生性 (animacy) は言語人類学の用語だが、人種や障害やクィアなどの生政治を捉える理論でも用いられている (Chen 2012)。
 - 10) クィア理論との接続の例として、ほかにも対物性愛をベルサーニらの言う「非人称的ナル

シシズム」と解釈する議論がある (Musser 2013)。

- 11) 同様の問題は、ジェンダーに関する形態的本質主義としても生じうる。
- 12) 物や概念などを二次元キャラクターに翻案することを「擬人化」と呼ぶこともあるが、これは正確には「キャラクター化」(Nozawa 2013)である。
- 13) こうした人格概念の理解については、人格を関係的かつ文脈依存的なものとするアニミズム研究 (Willerslev 2007=2018) が示唆に富む。
- 14) しばしば対物性愛は生きていない (inanimate) 物へ性的・恋愛的に惹かれるセクシュアリティだと説明される。しかしそれに対して、自分の愛する対象は生き生きと魂を有しており、決して生氣のない (inanimate) ものではない、という反論が対物性愛者からなされることがある。
- 15) 筆者は別稿 (松浦 2022b) で認知言語学のメタファー論をもとに、非対人性愛による攪乱を論じているが、そこで扱っているのは、対人性愛の営為を記述するための語彙を非対人性愛側がメタファー的に流用するという実践である。それゆえ筆者のメタファー論は、本稿が問題とする「対人性愛＝真正な実体／非対人性愛＝偽りの代替物」という非対称性をむしろ批判するものである。なお筆者は二次元がもたらす攪乱について、メタファー論と東浩紀の誤配論をもとに論じたが、この理論が対物性愛などのさまざまな非対人性愛にも適用できる可能性を示唆している (松浦 2022b : 73)。この理論が実際に他の非対人性愛にとってどのような有用性を持ちうるかについては、今後の課題としたい。
- 16) セックスロボットは現時点では一般化しておらず、実際の愛好者に関する研究もかぎられているため、セックスロボットが非対人性愛的な文化や慣習を涵養する領域となるかどうかは今後研究が必要な問いである。
- 17) 二次元の性的表現 (を愛好する営み) を対人性愛の表象として扱くと、二次元をめぐる非対人性愛の存在を抹消することになる、ということを下記の拙論で指摘している。

“作中での女性キャラクターと男性キャラクターの関係”と“女性キャラクターと男性受容者の関係”と“現実での女性と男性の関係”とを重ね合わせる形式の議論では、対人性愛が予め自明化されてしまい、「二次元」へのセクシュアリティという問題がジェンダーの論点に還元されるかのように抹消されてしまうのである。(松浦 2022b : 143)

もちろん非対人性愛を対人性愛に見立てて分析することが一定の発見をもたらす可能性は十分ありうるが、しかし方法論上不可避免的に非対人性愛を抹消することになるという問題に自覚的でなければならない。

なお同様の問題は、BLをゲイ男性の「表象の横奪」として論じる議論にも見られる。たとえば石田仁は、一方で記号の誤配可能性に言及しているが (石田 2007 : 117)、そこで想

定している誤配は、あくまでコンテンツで描かれる内容に関するものである。つまりここでは、記号解釈とは別次元の存在論的な誤配（松浦 2022a：68）は想定されておらず、また誤配可能性がどのように抹消されるのかという社会的問題も看過されている。

- 18) こうした実体／表象という序列化された二分法を脱構築するうえで、模倣がキーワードとなってきた（e.g. Butler 1993=1996）。また模倣はアニミズムを理解するうえでも重要な概念だとされている（Willerslev 2007=2018）。
- 19) このような抹消は、セクシュアリティをめぐる社会的な解釈資源が対人性愛を前提としたものとなっていることに起因するものであり、その意味で認識的不正義——とりわけ解釈的不正義——の問題でもあると考えられる。
- 20) 同様のことは、アセクシュアル研究や、二次元の性的表現を愛好する営みに関する研究でも指摘されている（e.g. Miles 2020：274）。
- 21) 同様の点はフィクトセクシュアルをめぐるウェブ投稿にも見出せる（松浦 2021b）
- 22) これに加えて、西洋近代的思考を批判しつつフェティシズム概念を別様に捉え直すことも重要だと思われる。フェティシズムに関する近年の議論としては田中編（2009, 2014, 2017）が挙げられる。なおシルヴィオはフェティシズム概念を問い直す際の事例として、アニメ・ファンダムの人々に言及している（Silvio 2019：207）。

文 献

- Brake, Elizabeth, 2012, *Minimizing Marriage: Marriage, Morality and the Law*, Oxford: Oxford University Press. (久保田裕之監訳, 2019, 『最小の結婚——結婚をめぐる法と道徳』白澤社.)
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, London: Routledge. (竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- , 1993, “Imitation and Gender Insubordination,” Henry Abelove, Michele Aina Barale and David M. Halperin eds., *Lesbian and Gay Studies Reader*, New York: Routledge: 307-20. (杉浦悦子訳, 1996, 「模倣とジェンダーへの抵抗」『imago』7(6): 116-35.)
- , 1997, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Redwood City: Stanford University Press. (佐藤嘉幸・清水知子訳, 2012, 『権力の心的な生——主体化=服従化に関する諸理論』月曜社.)
- Chen, Mel Y. 2012. *Animacies: Biopolitics, Racial Mattering, and Queer Affect*. Durham: Duke University Press.
- Cole, Kristen L. 2022. “Communicating Human-Object Orientation: Rhetorical Strategies for Countering Multiple Taboos.” Pp. 322-43 in *Handbook of Research on Communication Strategies*

- for Taboo Topics*, edited by G. D. Luurs. Hershey: IGI Global.
- Dooley, Ben, and Hisako Ueno, 2022, “This Man Married a Fictional Character. He’d Like You to Hear Him Out,” *New York Times*, Retrieved May 9, 2022, (<https://www.nytimes.com/2022/04/24/business/akihiko-kondo-fictional-character-relationships.html>).
- Foxwell, John, Ben Alderson-Day, Charles Fernyhough, and Angela Woods. 2020. “I’ve Learned I Need to Treat My Characters like People’: Varieties of Agency and Interaction in Writers’ Experiences of Their Characters’ Voices.” *Consciousness and Cognition* 79. Retrieved September 30, 2022 (<https://doi.org/10.1016/j.concog.2020.102901>).
- Galbraith, Patrick W. 2017. “RapeLay and the Return of the Sex Wars in Japan.” *Porn Studies* 4 (1):105-26.
- Gupta, Kristina. 2015. “Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept.” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 41 (1):131-54.
- 濱野千尋, 2019, 「犬を『パートナー』とすること——ドイツにおける動物性愛者のセクシュアリティ」大石高典・近藤祉秋・池田光穂編『犬からみた人類史』勉誠出版, 389-408.
- 石田仁, 2007, 「「ほっといてください」という表明をめぐる——やおい/BLの自律性と表象の横奪」『ユリイカ』39(16) : 114-23.
- 倉田剛, 2019, 『日常世界を哲学する——存在論からのアプローチ』光文社.
- Karhulahti, Veli Matti, and Tanja Välisalo. 2021. “Fictosexuality, Fictoromance, and Fictophilia: A Qualitative Study of Love and Desire for Fictional Characters.” *Frontiers in Psychology* 11. Retrieved September 30, 2022 (<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.575427>).
- Luck, Morgan. 2009. “The Gamer’s Dilemma: An Analysis of the Arguments for the Moral Distinction between Virtual Murder and Virtual Paedophilia.” *Ethics and Information Technology* 11 (1):31-36.
- Marsh, Amy. 2010. “Love among the Objectum Sexuels.” *Electronic Journal of Human Sexuality* 13. Retrieved September 30, 2022 (<http://www.ejhs.org/volume13/ObjSexuals.htm>).
- 松浦優, 2021a, 「二次元の性的表現による「現実性愛」の相対化の可能性——現実の他者へ性的に惹かれない「オタク」「腐女子」の語りを事例として」『新社会学研究』(5) : 116-36.
- , 2021b, 「日常生活の自明性によるクレーム申し立ての「予めの排除/抹消」——「性的指向」概念に適合しないセクシュアリティの語られ方に注目して」『現代の社会病理』36 : 67-83.
- , 2022a, 「メタファーとしての美少女——アニメーション的な誤配によるジェンダー・トラブル」『現代思想』50(11) : 63-75.
- , 2022b, 「アニメーション的な誤配としての多重見当識——非対人性愛的な「二次元」へのセクシュアリティに関する理論的考察」『ジェンダー研究』25 : 139-57.
- , 2022c [近刊], 「雰囲気としての強制的（異）性愛——アセクシュアルを理解可能

- にするため現象学」稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学（仮）』ナカニシヤ出版。
- McArthur, Neil, and Markie L. C. Twist. 2017. "The Rise of Digisexuality: Therapeutic Challenges and Possibilities." *Sexual and Relationship Therapy* 32(3-4):334-44.
- Miles, Elizabeth. 2020. "Porn as Practice, Porn as Access: Pornography Consumption and a 'Third Sexual Orientation' in Japan." *Porn Studies* 7(3):269-78.
- Motschenbacher, Heiko. 2014. "Focusing on Normativity in Language and Sexuality Studies: Insights from Conversations on Objectophilia." *Critical Discourse Studies* 11(1):49-70.
- . 2018. "Language and Sexual Normativity." in *Oxford Handbook of Language and Sexuality*, edited by K. Hall and R. Barrett. Oxford: Oxford University Press.
- Musser, Amber Jamilla. 2013. "Objects of Desire: Toward an Ethics of Sameness." *Theory & Event* 16(2). Retrieved September 30, 2022 (<https://openscholarship.wustl.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1005&context=wgss>).
- Nozawa, Shunsuke, 2013, "Characterization." *Semiotic Review* 3. Retrieved October 26, 2022, (<https://www.semioticreview.com/ojs/index.php/sr/article/view/16>).
- オブジェクトウム セクシュアリティー インターナショナル, 2022, 「ホーム」(2022年9月28日取得, <http://objectum-sexuality.org/jap/index.htm>)
- Przybylo, Ela. 2016. "Introducing Asexuality, Unthinking Sex." Pp. 181-91 in *Introducing the new sexuality studies: 3rd edition*, edited by N. Fischer and S. Seidman. London: Routledge.
- 西條玲奈, 2013, 「性愛の対象としてのロボットをめぐる社会状況と倫理的懸念」『社会と倫理』(28) : 37-49.
- 関根麻里恵, 2021, 「ラブドールの「見た目」に関するいくつかの覚書」『現代思想』49(13) : 218-25.
- Stone, Richard, 2022, 「セックスロボットをめぐる倫理的問題——「表象の問題」と「治療としての可能性」を中心に」『応用倫理』13 : 45-57.
- de Szegheo-Lang, Naomi. 2015. "Non-Sexual Spooning and Inanimate Affections: Diversifying Intimate Knowledge." *Atlantis*. Retrieved September 30, 2022 (<https://journals.msvu.ca/index.php/atlantis/article/view/2874>).
- 田中雅一編, 2009, 『フェティシズム研究 1 フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会。
- , 2014, 『フェティシズム研究 2 越境するモノ』京都大学学術出版会。
- , 2017, 『フェティシズム研究 3 侵犯する身体』京都大学学術出版会。
- Terry, Jennifer. 2010. "Loving Objects." *Trans-Humanities Journal* 2(1):33-75.
- 匿名希望, 2020, 「AIと性愛——AIと人は親密さを築くことができるか」稲葉振一郎・大屋雄裕・久木田水生・成原慧・福田雅樹・渡辺智暁編『人工知能と人間・社会』勁草書房,

170-203.

夜のそら, 2020, 「恋愛伴侶規範 (amatonormativity) とは」(2022年9月28日取得, <https://note.com/asexualnight/n/ndb5d61122c96>).

Willerslev, Rane, 2007. *Soul Hunters: Hunting, Animism, and Personhood among the Siberian Yukaghirs*, Berkeley: University of California Press. (奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知訳, 2018, 『ソウル・ハンターズ——シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』亜紀書房)

Winter-Gray, Thom, and Nikki Hayfield. 2021. “‘Can I Be a Kinky Ace?’: How Asexual People Negotiate Their Experiences of Kinks and Fetishes.” *Psychology and Sexuality* 12(3):163-79.